



テンナイトなる催しに我が落語教室も参加した。松江でラテン音楽教室を主宰している先生たちが声をかけてくれた。サルサ、フラメンコは分かるが、そこに漢字で「落語」が並んでいるのかと疑問だったが、ラテン音楽を習う子どもたちが何人か落語にも来ているので、子どもの中では平気で共存しているのだろう。ジャンルなど子どもにとってはどうでもいいことなのだ。

サルサとフラメンコとそれぞれを踊ってみるコーナーがあり、合間に落語教室の子どもたちが小咄を披露した。落語をするまでは特にすることもないので、ぼくも踊った。

踊りに関しては、ぼくは長く鬱屈した思いを抱えている。小学校の時、時折体育でダンスをやらされた。当時は「リズム」と呼ばれていた。リズムになると決まって、ヘルメットみたいにきちんと切り揃えたおかつば頭のYというベテラン女性教師が指導した。パチとタンバリンを手にしたY先生が講堂に現れると（体育館ではない）、それだけでぼくは完全に萎縮し、錐で刺すかのような視線と指示、耳を聳するタンバリンの音にひたすら怯えた。

「八呼間右へ！」
「次の四呼間で回って！」

今でこそ漢字で書けるが、ぼくはずっと「こかん」が何を意味するのかわからなかった。ビンタを浴びているようなタンバリンの音に合わせて動くこともとても難しかった。できることと言えば、前や隣の子を見て真似を試みることしかなかったのだが、当然テンポが遅れる。尻尾を尻にはさんだ迷い犬が、逃げ場を失ってびくびくおろおろと足踏みしているようなかっこうで、ただただ終わるのを待つ。

Y先生は、ぼくをしかったりはしなかったが、慰めることも、やる気にさせるために言葉をかけることも、何もしなかった。タンバリンの音で指示通りに動く大多数の子どもたちがよりきびきびと動くよう、短く鋭く無駄のない言葉を発し続けた。

前で踊るサルサの先生の動きに合わせて、ステップや手の動きを真似る。踊りはダメという自覚が小学校で深く根付き、以来反射的に避けていたから、やはり今も踊れない。でも、それでもいいのだと思えるようになった。ずいぶんと時間がかかったが。

「先生、いいですねえ。上手！」
サルサの先生が笑って褒めてくれた。動きがよかつたからじゃない。じじいが照れもせず踊っていたからだ。おかげさまでとまでは言わないが、「リズム」とY先生のお導きにはちがいない。

老い老いに
木幡智恵美

17



集長に、「色々な方と知り合われるようですが、どうしてそんなことができるのですか」と聞いたことがある。すると、編集長は、「よく手紙書くんですよ。そしたら、意外に返事が来るんです」とのこと。小説家などからも返事がくるのだそうだ。編集長の奥さんからこんな話も伺った。「電話がかかってきて、谷川と名乗られたんです。どこの谷川さんかと思ったら、あの谷川俊太郎さんで、もうびっくりして……」先日九十二歳で亡くなられた谷川俊太郎さん。高校時代、「二十億光年の孤独」の詩には衝撃を受けた。その詩の作者である谷川俊太郎さんを当時編集長が拠点としていた奥出雲にまで呼びびしている。半端ない行動力にただただ脱帽。その編集長が一九九六年九月からハンセン病を取り上げた「涙の連絡船」を連載した。隠岐から松江に向かうフェリーの中で、論楽社のブックレット『病み捨てられた人々―長島愛生園・棄民収容所』を再読したのがきっかけのようだ。「涙の連絡船」を連載した後、戦争中のフリーピンについての連載を続けるのだが、その後、実際に長島愛生園を訪問することになるのだから驚きだ。

劇団「たいよう」を立ち上げ、『かつばの笛』の本土公演をやつてのけたYさん。十月からは隠岐を離れ、広瀬に新しくできる福祉専門学校立ち上げに携わることになる。そして、『かつばの笛』を公演した「しいの実シアター」を擁する劇団あしぶえの研究生としても通われることになり、「放浪の記」のタイトルでその歩みが掲載されていく。

編集長もYさんも私より少し若く、当時三十台後半。お二人とも、たくさんの人と出会い、その人たちに魅せられ、深くかかわっていく。そうした中で人としての重みも厚みも出てくるのだなと薄っぺらな私は感じ入ってしまう。『病み捨てられた人々―長島愛生園・棄民収容所』を出した論楽社に編集長は発信する者として多大な影響を受けていて、「論楽社の方から二十年続けることですよと言われました」と聞かされていた。私には自慢できるようなものは何もないけれども、三十年続いた夕焼け通信に関われたことだけは誇らしく思う。

30代フリーター シリアで半世紀以上におよんだアサド父子2代による独裁政権が崩壊した。

年金生活者 グローバルな覇権だけでなく、ローカルな覇権も不在になりつつある世界の現在を示している。

首都ダマスカスがまたたく間に反体制派の武装勢力に制圧されたのは、ロシアとイランが政権を支えきれなくなったことによるとされている。ロシアはウクライナとの戦争に、イランはイスラエルとの衝突に手を取られ、シリアに注ぐ余力を失った。

それはこの地域におけるロシアとイランの覇権が大きく後退したことを意味し、アフガニスタン戦争とイラク戦争のあと、世界におけるアメリカの覇権が後退したと軌を一にしている。

アメリカが世界の覇権を握っていた時代は、その手下に相当する国家が地域の覇権を握り、その下に被覇権国家がぶら下がっていた。しかし、そうした秩序は崩れ、世界は米中対立とそのあおりを食った諸国によるせめぎ合い

年金 吉本隆明が敗戦直後に経験した権力の空白を回想して、人間は国家などなくても生きていける、とどこかで語っていたのを思い出す。吉本が戦後民主主義に対して批判的だったのはそのときの体験があるからだろう。せっかく？解体しかけた国家の再建に邁進したのが戦後民主主義だったからだ。

他方で、このときの権力の空白は、日本人が国家というものを相対化する契機となったはずだ。それが非戦の憲法とシンクロナイズし、西洋生まれの政治装置である憲法を東洋の果ての島に定着させることになったと考えることができる。

30代 それと対照的に中東では国家が命綱のように考えられている。イスラエルはシオニストが国家がなければ自分たちは生き延びられないと考えてつくった国だ。それによって土地を奪われ、家族を奪われたパレスチナ人は国を持たないことの恐ろしさを経験し、自分たちの国家をつくるのが悲願となつた。今のシリアにとっては国家の

の場と化した。

30代 アメリカをはじめとした西側諸国がいくら経済制裁と武器援助でウクライナをあと押ししても、中国や北朝鮮を味方につけたロシアを押し返せないでいる現状を見て、西側諸国の衰退と中ロやグローバルサウスの台頭を世界史の趨勢とする見方がある。

年金 それは世界史の流れのすべてではない。ロシアはアサド政権の崩壊で中東でのブレゼンスを大幅に失っただけではない。トランプの仲介でウクライナでの停戦が実現し、占領地域をわがものにするのができたとしても、新たに本格的な戦争を始めることはできない国になるだろう。アメリカがウクライナに兵を出せない国になつたように。

それにくらべると中国は傷が浅い。経済は停滞したままだが、流血の戦争を長いあいだ避け、「改革開放」を進めてきた結果、無血の戦争を遂行する抑止力を飛躍的に向上させた。

アメリカやロシアの侵略戦争を目の当たりにして、流血の戦争がどれだけ再建が悲願だろう。だが、「待ち受けるのは主導権をめぐる民族・宗派のぶつかり合いだ」という指摘がある（12月9日日本経済新聞）。

年金 けれど、それはアサド政権の苛烈な独裁よりもシリアの人びとに希望

国力を削いでしまうかを知った中国は、世界第2位となつた経済力と、それによって獲得した抑止力を使う無血の戦争を今後も進めるだろう。

30代 政権崩壊後のシリアの首都ダマスカスに入った毎日新聞の記者がレバノンとの国境付近の様を伝えていた（12月12日）。

「国境の監視施設は空っぽのまま放置されていた。かつて厳しく目を光らせていたはずの兵士はいない。入国審査や税関があつた場所では、銃を持った反体制派の戦闘員らが行き交う人をながめている。このうち1人が車の中をのぞき込んで、笑顔で言つた。『ウエルカム・トウ・シリア（シリアへようこそ）』」

記事には、避難先のレバノンから車でシリアに戻る一家がピースサインをしながら、無人となつた旧政権の検問所を通過して行く写真が付けられている。国境の壁が消えたこの光景は、国家が根幹の機能のひとつを停止し、半身を失つたような状態に陥っていることを語っているように見える。

を与えるだろう。「主導権をめぐる民族・宗派のぶつかり合い」は独裁よりも民主主義に近いと言える。

アサド政権の打倒を主導し、暫定政権の中心となつたのは反体制武装組織「シャーム解放機構」（HTS）で、アメリカや国連からテロ組織に指定されている。しかし、現在は穏健化を図る姿勢を見せ、米国がテロ組織指定の解除を検討しているとも伝えられている（12月12日朝日新聞朝刊）。

また暫定政権の報道官は「シリアにおける宗教的、文化的な多様性を尊重する」と語つたと報じられ、「民主的な国家建設の方針を強調することで、広く国際社会の支援を得る狙いがあるとみられる」と説明されている（12月14日朝日新聞朝刊）。

強権支配をすれば、それに反対する勢力が必ず出てきて、再び内戦になり、大国の介入を誘う可能性がある。HTSはこれまでの長い経験から、それを避けようとしているように見える。

ニュース日記 951
中村 礼治

シリアは民主化するか